

存在 (ト・エホシ^{to iōv})、又は^ユ。ユ^ムシ^ンス^Πε^ρι^Φύ^σε^ως

存在といふは只管存在なる哉。實直觀せば不可得。爾して一切非、且つ、非、一切非、
哉。非知焉。路傍之石、道端の道祖神石像、石庭、いずれも素の儘にて、ただ、空莫。
真空(Vacuum)のごとく、生存を絶し尽くすまでの純粹。

存在只是存在、它無味又乾澀、甚至不是不存在、無止盡的過度自由、路旁被風雪損壞的古
老石像(存在はただ存在、無味乾燥、非存在でならない。無際限なまでに過剰な自由、
路傍で風雪に壊れた古い石像)

無言、無表情。存在は、あらぬ (to m̄ òv) シと、同義。其の甚深たるや神聖です
らある。

Mute. No expression. Existence is even "Absence non-presence (to
m̄ òv)". It is deep profound and even sacred.



-Anti-

狂裂

もはや Antique の類、かつてはレコードなどといふ、塩化ビニールに黒色を出すためのカーボンブラックを混ぜた薄い円盤型^{レコード}のメディアがあつて、それを収納する専用のジャケットがあり、其の多くは紙製で、意匠を凝らした写真や絵等^{なま}が刷られてゐたが、彼の見掛を喩へるにあたつて、ジャケット写真を言ふと、あゝなるほどと思ふ方が多いゆゑ、頻繁に曰く。たとへば、The Beatles の名盤『Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band』又は The Rolling Stones の『Their Satanic Majesties Request』など。

^{あまやすまじことや}天易真分のその奇體奇天烈な風体は、さういふサイケデリックなものであつた。

恐らく、初めて彼を見た人は、誰もが呆れて上から下まで二度、三度眺めるであらう。鍰の広いウィザード・ハットは黒きフェルト地の尖つた細い三角錐の山高で、山が斃れてゐた。手入れをしているふうはなく、磨れテカつてゐる。五年くらい、毎日、使つてゐるであらう。そんなことは一向気にしてゐるふうもなく、すました顔で片眼鏡を細く高い鼻梁に掛けてゐた。

長い髪は帽子の下からあふれる瀧のやうに、尻下まで波打ち落ち、頬髭や口髭や顎髭が臍下まで垂れてゐる。毛質は艶がなく、乾いてパサパサしてゐた。黒よりも灰色のやうに感じられるのであつた。

膝下丈のミリタリー・コートの生地は艶やかな絹子、パステルのやうな発色の水色であつた。胸にきらきら燦めく金の糸の紐飾り、肩に房飾りがある。刺繍の入つた大きな襟は顎を隠すように立ち上がつて折れてゐた。ピンで留めしカフスには、レースが奢られてゐる。

弩派手なペイズリー柄の真紅の絹タイを、マフのやう、首にぐるぐる巻きにしてフランス革命後に流行つたスタイルに結び、いつも海泡石のキャラバッシュ・パイプを咥へてゐた。

マッチ棒のやうな脚に Levi Strauss & Co. のスキニーな十六オンス・デニムのジーンズを穿く。その裾は形崩れした蛇の皮のロング・ブーツに収められてゐた。

緩み崩れたそのブーツは本来、筒状で、膝下までも届くものであるが、その半分くらいしか至らず、だらしなく垂れ、ルーズ・ソックスみたいに見えなくもないが、そんな訳がない。

なぜ、今さらさやうな Material をいつら言ふかといへば、乾涸^{かわ}びし花の乾燥せるさまを見るうち、意識が意思に閑はらず遷移し、つむぐからである。さう。

ラベンダーであつたときの影を遺すドライ・フラワーを眺め、頬杖を突き、ふつと

想ふ、是、人にあらば木乃伊、と。

花々ゆゑ、梁やら、壁の飾り板やら、さかさ吊りの憂き目に遭ふ。人にあらばやすらかに柩にて、世のすべてから解き放たれてゐやうものを、などと謔たはぶれが蒼穹の一片の雲のやう、脳裡を過ぎりて心を翳す。くちもとを動かすことなく、くすり笑ふ。

萬物齊同（すべてはひとしくおなじ）といふが、とても。

いや、違ふ。花木乃伊はなみいさまたちも、とてもおしずかに、時止まりしやう、微動すらないおしとやか。静寂の死に顔。

さやうなさまを見るうち、彼の Blues Harp の一小節を思ひ出し、音の起想力に因つて、観たこともないやうな場面を、内在に現象させる。洞窟の壁に映る Movie のやうに。

『ニューヨーク New York. ハーレム Harlem. 古い赤煉瓦のアパート。黒い鉄製の外附階段。半地下の部屋の割れた曇りガラスの窓、寂しい歩道。手摺のある玄関前の石段。伍段あり、黒人が坐っている。手に小さなブルースハープ Blues Harp. リードの震えのひずみは、半音下がった、即物的な、かん高いブリキ音と、ぶち壊れたチューバのような低い金属の音の雑ざったやうな、不安定な、揺らぐ音程。乾き切った、深みやまろみや潤いのない、輪郭のきつい、存在のくつきりしたサウンド Sound. 真夏の昼下がりの、気怠い静寂を裂帛する、古い蛇口の栓を捻るやうな、響き』

金属のリードの震へは、ブリキ製の空き缶のやう、蓋が反れ上がつて、棄て置かれてゐた。

無言、無表情。存在は ト・メー・エオン “あらぬ to mē ōv” ですらない。其の甚深。神聖ですらある。

彝之イタルの綴りし一文。

『LABEL ※スル、レットル、ベル、レタル、紋字 鯉 ※軟鋼の基盤、銅の薄膜を鍍膜したもの BLIK ※軟鋼の基盤、銅の薄膜を鍍膜したもの 製 賞味期限四九八・二二八 年 かんき 截りの刃 やみば を用ゐる ZAKZAK 截り裂き牽き剥ぐ蓋面 は の ZUDAZUDA もぐやな截り口 くち めがら捲れ上り あが て頸刎れ顛さ くびき 磔の骸が如く疚き仰け反り逸れ販り は 剥ぎがまま。からっぽ。子と存。存在 こ が炸裂である。存在とふ炸裂である。平常とふは狂絶空がゆる自在奔放をも自裂する自在 ひやうじよう 奔放、狂奔裂である。Blues Harp が歪みのごとく。不自由にさへあり。（『遭されなかった古文書』）

けふがめいにち、霜降月廿日。それゆゑにかくも想ひが鬱勃するか。

今し、考ふに、天易真吟の場を弁へぬあの唐突なハモニカも、狂炸死への反歌。

八年まへのこの日、彝之イタルは聖なる眞神の御山の頂きにある古代祭祀の譬代の上

にて、ガソリンを被り、炎燃え裂けつつ、飛翔した。自殺ではなく、狂裂なるパンク・ロ
ッカー、彝之イタルの畢竟究竟窮極の炸裂の Performance であつた。當時、若干
十七歳といふ天さ^{わか}であつた。

一切の妥協なき狂奔裂。彼が最後に書き残せしは短き長歌。

透きとほる Blue Black 明未ぬ寅一^{あけならとら}つ刻^{※とき}靈玄^{りようげん}の狭霧^{さぎり}浮遊^{うすう}ふ白黎^{はくれい}の氣^けを孕み
つもあをきとき^蒼こころやすらぐ

マイルス・デイヴィスを聴きながら

いつに在ったことか、Miles Davisを初めて聴いたという事象は。

今し想えば、吃驚するぐらい遅かった。三十に近くなつてからであつたらう。

よくある話だが、なぜそれを聴いたか、憶えていない（小説などでも回想の場面によくあるフレーズ）。

シチュエーション丈だ、脳裡に映像として明晰に遺る記憶は。

自家用車の操縦席、たぶんコンポに繋げた音楽アプリから聴いていたと思うけれども、それまでジャズに興味がなかったが、なぜ、そのとき唐突にチョイスしたか。その記憶がない。

恐らくは、ミュージック・アプリにお任せであつたであろうが、それにしても、何系かくらいは必ず指定するはずで、まったく意に関わらぬものではなかつたと推定されるが、なぜ、その方向へ赴いたかが、一向わからぬ。思い至らぬ。様々に、空想はできるものの。

兎にも角にも、それら諸事情の周辺は覚えていないが、明晰判明に憶えている、ただ、ただ、衝撃であつたことは。

曲はシャンソンの名曲『枯葉』（仏：Les Feuilles mortes、英：Autumn Leaves）は多くのジャズ・ミュージシャンにアレンジされ、演奏されているが、マイルスのプレイは絶妙なミュートによる繊細な感情表現で、どんな言葉よりも、緻密に心の襞をトレースし、ダイレクトに気持ちを伝動する。心から心へと直截バイブレーションする。『直截』ということ。それ自体。何もない。あらぬ。音の存在は、それゆえ、リアルで、ヴィヴィッドであつた。

言葉がないだけに、むしろ、現実が直截、喰い込んで来るような感覚があつた。音という存在が、現実存在が、何ものも仲介・介在せずに直に Impact する。

言葉や概念などその表現しようとするものそのものではないが、音はいつでもそのものだ。音としてしかアピールして来ない、音自体でしかない。素材丈でしかない。素でし

かない。それゆえ、ダイレクトだ。由縁を介在しない。ガツンとした唐突性の在る衝撃。

いや、人のみならず、動植物や虫や魚介にさえもあたえるであろう。音は物的な現象だから、物的な存在であるから、必ずや。

それは茶陶器など焼き物の景色に通じ、自然の事物・風景の存在の捉えられなさ、多岐複雑微妙繊細精密さに通ずる。

その上に、金管楽器やハモニカなど、金属のリードを持つ楽器の味わいは、また独特なものがある。マイルスのミュート奏法はそれを晰劃にする。

硬質で、無機質、響鳴の抑制された、ものとしての音。ドライでクールだ。存在の無言。存在の無感情、無表情。もしくは時の止まった表情。そこには何もない、リアルで空莫、空絶絶空で、狂裂。それでいて、不可説な抒情が魂魄を奇襲する。筆舌に尽くせぬ狂奔裂。

生へ言語が到達できるものではない、という感想を抱いてしまう人間の感性の構造は、いったい、何ゆえか、いかような義があるというか。敢えて、設定する大自然の意向が、神意がわからない。

全ては、ただ、サウンドのヴィヴィッドなインパクトのように、唐突。唐突でしかなく、傍若無人に、意義・意味を無視してゐる。沙漠に在る、古代の遺跡のように黙して、凌儼で、甚だ奥深い。神聖崇高な、聖の聖なる非情性。

孰

若

古くから馴染みである、創業明治四十一年の書肆に来て、新しく刷り上がったばかりのカタログを手に天平普蕭はふつと思ひ出す。

アレクサンドル・デュマが愛書狂（ビブリオマニア *Le Bibliomane*）に就いて書いたユーモラスな短篇、『稀覯本余話（*Le Pastissier françois*）』に出て来るエルゼヴィル版に関することだ。

デュマと言えば、『三銃士』や『モンテ・クリスト伯』が有名な小説家だが、この短篇は創作と言うよりは実体験に基づくものらしい。

一九二〇年代、二十一歳でパリに出て来た無名の若者は着いたその日にポルト＝サン＝マルタン座に入り、芝居を覗ようとするが、そこで隣席に坐る男が手に持つ小さな古い書籍に興味を惹かれる。声を掛け、その本が愛書狂の垂涎の的、アムステルダム of 書籍商ルイ・エルゼヴィルが最初にその名を印した書を二五九二年に刊行して以来、彼とその後継者たちが刊行する書籍たち、所謂「エルゼヴィル版」の一つであることを知り、蘊蓄を聴く。

そういう展開なのだが、同じ書でも余白の大きさと値段が違うという件が最後の方に出来来る。大きいほど価値があると言う。

執著とは摩訶不思議なものだ。

世俗の価値とは所詮こういうものなのだろうが、超越は決して簡単ではない。むしろ、不可能だろう。

愛書の件で言えば、一部の人にしかリアルではないから、まだ笑えるが、誰もが共通のこととなると、ことの重大さは桁違いになる。

佛陀はかつて言った。

「人は死に際し、心と肉体が苦しむ。身肉は病や患い、又は怪我に苦しみ、心はこの先どうなるのか、又は過去を顧みて苦しみ、生を虚しく思い、又は独り自分だけが死ぬかのように想い、心苦しむ。

私の弟子は肉体は苦しむが心は苦しまない」

大乘仏教主体の国では、この教えは佛教らしくない。大乘の菩薩行は壮大な思想へと発展した。その思想の中心は空であるが、釈迦牟尼如来自身はほとんど空という語を使っていない。

スッタニパータ
経の集成に晰らかだ。

この世は空であるとは、どちらかと言えば、大乘仏教の祖と言われる龍樹菩薩以降だ。そして、空から聯想するのは、古代ギリシャ哲学の *to pñōv* だ。

龍樹 (梵 *नगार्जुन* *Nāgārjuna* 二世紀に生まれ。インドの仏教僧) が唱えた空觀と、パルメデニス (古希: *Παρμενίδης* 紀元前520年頃—紀元前四五〇年頃) の *ἄραぬ* (ト・メー・エオン *to pñōv*) は同じではないように見える。

「*ἄραぬ*」は考概ならぬもので、認識や思惟・思考の対象ではなく、意識できない。通俗的な慣用語の「論外」である。

龍樹は因果関係によって現象が現れているのであるから、それ自身で存在するという「独立した不変の実体」(「自性」はないことを明かしている。これによって、すべての存在は無自性であり、「空」であると論証している。このことから、龍樹の「空」は「無自性空」とも呼ばれる。

この空の思想は、真理を

概念を離れた真実の世界 (第一義諦 *paramārtha satya*)

言語や概念によって認識された仮定の世界（世俗諦、*samvrti-satya*）

という二つの真理に分ける。

言葉では表現できないこの世のありのままの姿は、第一義諦であり、概念でとらえられた世界や、言葉で表現された釈迦の教えなどは、世俗諦であるとするため、この説は二諦説と呼ばれた。

仏陀の言は現実的だ。空には到達できない。　あらぬだ。

遂げられぬ。人は勝てない。執著の根源は生存であり、細胞レベルである。有機物の化学反応の累積である。我々はその表層に過ぎない。

生存を大海とすれば、顕在意識、人間存在は表面をなすがままに漂流する一枚の木の葉に過ぎない。

世に神の祈り

聖なる眞神山を登るしかない。

僕は韋究とともに逝った。

石段を踏む。踏むたびに清澄な空気が沁み入り、自然とともに在ると、唐突、断裂劃断に観ずる。將に、清明躬に在れば氣志神のごとし。そういう實感であった。實感として、實在だった。不分明な僕の感覚であっても、それでしかないと考えた。

「この岩山って、何だか人工のオブジェみたいだろ？」

韋究が言った。確かに觀ぜられる。

この山は、山と言うよりかは、一個の巨石（まあ、岩か、巖と言ってもいい。それらの違いは僕には定かではない）。

まるで、正立方體、極太の角柱のようでもある。六つの平滑な面が立方形を做す。巨石が垂直に聳える。立面は垂直、頂上と底とは全くの水平に平行する。

垂直に切立つ巖壁面の全ては、東西南北に正確に向いている。

石。

一個の石。

それは凄まじいまでの威嚴を湛えていた。

壯嚴が地響きのように大地を激震し、天穹に鳴り渡るかのようにであった。

偉容の崇高さは途方もなく、その聖の聖なる神聖さは恐ろしいほどに儼然と聳え、人間の根源の畏怖を揺さぶり、神の偉大さに生命の根底にある恐れを呼び覺まさせる。

存在が放つ巨魁さは、大宇宙をも壓倒、凌駕するかのようであった。

あたかも、眼前に太陽神アメン・ラーが燦然とあらわれたかのように。

夜陰も日影もなく遍照する絶対の太陽である大毘盧遮那佛の空前絶後の光の潮の氾濫が横溢の眩さで網膜を射抜くかのようにであった。

存在が言葉にも概念にもならぬ無数の言語を以て、思惟・思考や諸考概を収まらぬ氾濫を起こす。超絶弩級の壓であった。

存在は摩訶不思議だ。一體、何であろうか。わかりようがない。わかり方がない。

いや、そもそも、わかるとは何か。わかったから何だと言うのか。まるで、ナミブの沙

漠だ。無すらもない。だから、存在なのか。何もわからない。不可思議でしかない。喩えようもない。妙義としか言いようがない。

何もわからない。どうしていいのかもわからぬ。ただ、祈ることしかできない。積極的努力がそれしかない。こうべを垂れて、意地面子も我執執著も棄て、清く明かし素直な心髄精神魂魄を以て。

こんな世迷いごと、現実主義の諸兄ら、実利主義の諸氏らには、バカらしい限りであろう。ましてや、金銭財産や権力や名声や所有占有など私利私欲の亡者である愚連の輩には。

全ては自然発生的で、そうでなければならぬ決定的な根拠の不明な、實質・實體のつかめない、實観としてはただインパクトでしかないもの、諸概念・諸考概・想起・意識とかいずれも指定でしかないものでしかなく、感覚に因る効果丈であつて空疎としか感じられない、五蘊の結ぶ現象でしかないものであるが、たとえば事故や戦争や怪我や病氣や涸渇や飢餓や躬體への攻撃が現に苦痛を生むのであれば、金銭や所有や名譽・権力の愕然たる喪失が心破る苦しみを生むのであれば、己の死や家族の死が悲歎で魂を裂くのであれば、それは正しく現実である。

心なき非にして儼かなる現実であつて、それ以外の何者でもない。切實がリアル。峻嶮と聳える絶壁。義も意もない。ただ、無慈悲・無情・無条件に凍厳。

それを重んじることがリアルティ。誰もが何よりもそれを優先せざるを得ない。勝てないからだ。

だが、實質・實體として實のないものであることも事實。それも他ならぬ我らの此の感覺に於いて。

ただし、それもこれも、我らが眼に観えるがままだとすれば、という仮定の話。何もかも、仮定、架空、もしもの話。

魂魄は足掻き藻掻くばかりで、知は何處にも如何様にも収まることを得ず、奚ぞ遂げんや、境地境涯・かたち・何だかの結論。

無余依涅槃や阿耨多羅三藐三菩提など夢の夢のまた夢の夢。
思惟を超越した睿智でもなくば。

頂上は鏡面の水平であつた。まさしく立方。垂直に屹立する黒い巨石のその天辺には、靡く龍旗のように横長の、大磐が載っている。それも石（又は、岩か、巖）であるが、眞神の御山の『屋上』の面積のほとんどを占有し、かつ、東方向に大きくはみ出してゐた。眞神山が垂直と水平と直角とで構成されている人工物のような象であるのに比べ、この黒石は純粹なる自然石の姿、尖つた起伏や鋭い凹凸、又亀裂などがある。対照的であつた。

想ひ込みでしかないが、最初、僕には山全体が一字の漢字『彝』に視えた。頂上にある、自然形の石が、異形の、デフォルメされた、偏旁の「亠」、又は「亠」（けいがしら、いのこがしら）に觀ぜられた。尤も、漢字の亠は横にずれて右にはみ出したりはしていないが。

「ちようど、頂上に巨大な磐代（神の依代）が載っているのが見えるだろう？」

そう言われて、僕は黙つて頷いた。何かを感じ取つていた。

韋究の表情が少し硬くなる。自虐的な皮肉の微苦笑を浮かべながら。

「イタルが窮究極のパフォーマンスを演じたステージさ。古代の眞神の神聖な祭祀の場だ」

僕は震えた。あそこが彼の死んだ場所なのだ。炎となつて炸裂した場所だ。常軌を逸している。炸裂、まさに狂つたかのように奔放な炸裂だ。僕は韋究の言葉に対して、何も応えられなかった。

ただ、山は儼然と聳える。一つの石であるその山は。

『あらぬ』は概念や意識や考概の対象ではない。その俎上に上がるもの、想ひに浮かぶもの、劃かれるもの、思考に定義される一切は、『あらぬ』ではない。だから、～ではない的な定義もできない。そら、これも。

漆黒の正立方體の大巖（若しくは石）の高さは地中に埋まっている部分も含めれば、五百二十四メートル、東西南北に正確に向かつている縦横奥行きの各辺もまた五百二十四メートル。

古代エジプトの長さの単位である一キュビットが五十二・四センチメートルであることを想うと、不可思議の觀に撃たれる。ちょうど一千キュビットだ。

その上に立つ磐代も、高さは四十四メートル。縦横五百二十四メートル。

彝之イタルはあの四十四メートルの磐代から飛んで、眞神の頂上に墜ちて死したのだ。燃え裂けながら。古代の祭祀が行われた場所で。

震えが止まらない。何か恐ろしいものを見てしまったかのように。

現實的に考えても、もし、勢いが余って、さらに下に墜ちていたら。それも有り得くない。『屋上』の面積は磐代が占有するせいで残された面がとても狭い。實際、東側が『屋上』から、大きくはみ出したりしていることを考えれば、磐代の面積的な大きさは『屋上』の面積以上だ。

麓は激しい溪流で、眞神山にぶつかって、一旦、二つに裂かれ、互いに左右を廻って再び合流し、まるで、天然の環濠だ。

飛沫を上げる怒濤は岩に砕け、轟音で場を、空間を、時間をすらも裂いていた。

僕らにできることは祈りでしかないだろう。

健の死

寧焼

『マハーパリニツバーナ經』に拠れば、シャークヤ族の聖者は齡八十となり、マガダ国の首都である王舎城から終焉の地クシナーラまで旅して、その地で沙羅双樹の中央（すなわち、雙^{ふた}つの樹の中央、二本の沙羅の木の間）に横臥し、無餘依の涅槃に入った。

その死因は食中毒であったと記述する近代の書もあるが、ヴァデー村の信者、金属細工師チェンダのマンガール林でスーカラ・マツダヴァ（栴檀樹耳。茸料理の一種という。スーカラは野豚の意なので、豚肉料理だと言う人もいるが、その茸を探すにあたって、豚を使うところにその名の由来があると言う。トリユフを探すのに、豚を使うのは有名な話。豚は地中に埋まったトリユフを探すのが巧いらしい）を食べて食中毒を起こすより前、雨季の安居に際し、既に罹病したという。

だとすれば、痛みに耐え苦しみながら、ヴァデー村に着いて、さらに食中毒になってしまったことになる。

一書によれば、苦しみの旅の途中、喉が涸れて渴し、「喉が渴いた。水が飲みたい」と言った。

死に瀕した釋迦牟尼の噂を聞き、駆けつけたマガダ国の王ビンビサーラはその衰弱に驚き、「解脱した佛陀は六道輪廻を超越し、帝釈天よりも優れ、不死であると聞いていました」

しかし、釋迦牟尼は「私も父母から生まれた人の子である。生まれた者は死するが定めである」と言ったと云う。

さて、諸氏に伺いたい。もしも、釋迦牟尼が不死を求めて佛陀となったならば、どうであろうか。それは死を超克したことになるのであろうか。吾人は決してそれは死を超克したことはないかと惟う。

人は、なぜ、不死を求めるか、シユメールの英雄、半神半人のギルガメッシュは、なぜ、不死を求めて旅に出たのか。死にたくないからではないのか。死にたくないから、不死を求めるのではないのか。

それは死を超克したことになるのであろうか。

否。死に因って斃されている。解脱ではない。

佛陀は死から遁げなかった。免れようとはしなかった。欲しなかった。解脱しているか

ら。

あたりまえに死んだ。ただ、普通の人として死んだ。普通の人として生きた。

だから、佛陀は「喉が渴いた、水が飲みたい」と言い、褻れて老い乾涸びた躬で旅した。死の超克とは、ただ、人として死ぬこと丈である。それが正しい。華弁が枯れて風に掻き墜とされるように。

それしかない。

言葉も概念もアイデアも本質も實體も崇高な真理も眞實も“あらぬ (vo pi òv)”である。

いや、“あらぬ (vo pi òv)”は『くである』を使つてはならぬ。

『くならぬ』と断言もならぬ。

ただ、死が在る。因子によつて縁り結ばれたものが解け解れ、崩れ毀れ、粉々となり、風の砂塵のように消え失せる。

そう見える。だから、そう想っている。それしかできないから。つまり、今、つらつらの叙べていることも、この瞬今に見(觀)ている全てが事實ならば、という限定附ということになる。そういうことだ。もし、そうでなかったら？

それが事實でなければ、もう、何もわからない。わかりようがない。“あらぬ (vo pi òv)”だ。

しかし、いずれにせよ、我々がわかっているものは、ただ、“わかった”が在るだけで、空疎だ。感覚、感情でしかない。空っぽで、實がない。わかつていないに等しい。いや、確かに、わかつてはいる。だが、それは、わかつていないと変わらない。

天易真兮は濃茶をかき廻した茶筌の雪を碗のふちで静かにゆっくり拭うと、茶杓の傍においた。茶杓は蟻腰の見掛であった。

腕をそつと差し出す。

その美濃焼の碗は志野と呼ばれる碗だ。ただ、物的存在でしかなく、五斗時粘土や、もぐさ土という白土を素地に長石を砕いて精製した白釉を厚めにかけて焼成される。因つて、何者でもない。ただ、釉の少ない際や口縁に緋色の火（緋）色という景色が現象する丈である。

彼は言った、

「但し、観えているとおりに、観えている 〴〵もの・こと〴〵がそれそのままに事實だとすれば、に限る。でも、そんなこと確かめようがない」

天
の
書

小春日和の長閑な或る日のこと、薙久蓑町の雑居ビルの一階で書肆を営む天平普齋は、彼の店内で古書を様々に物色しながら、京浜文學の冊子を眺めては歎息し、冬芽書房から出版された熱田五郎（本名：澁谷天珍児）の『さむい窓』を手にとっては、色褪せた表紙の水色や、さらさらと手書きされた、味わい深い簡略な表紙絵などを眺めて捲り、ページが日焼けでボロボロになっていることを楽しんでいる、そんなふうにししか見えない後輩の平衛隆臥に訊いた、

「君は、色々書いているようだが、誰に見せるでもなく、公募に応募もせず、投稿サイトに投稿する訳でもなく、親しい友にも読ませない。君は、一體、何をしているのか。どうして書くのか。どうしようと云うか。何のために書くか」

隆臥はぼんやりした虚な眼で顔を上げ、

「何ですか」

と尋ねた。無精髭を生やし、髪はボサボサ。いつもよれよれのデニムのズボン、ポケットの縫いを補強する銅製リベットにはツヤがない。冬はセーター、春秋はスウェットかロンドンT、夏はTシャツ。靴下は履かない。靴はいつも薄汚れた布のバッシュ。要するに服は上下含めて五着（つまり、穿くのは一年中同じデニム）、靴は一足（サンダルを靴と数えていいなら二足だが）。

やや垂れ気味の大きな二重瞼がぼうつとした感じを与える。いい方に考えればラテン系の人のようでもあるが、ラテン系の人とは似ても似つかない。

「小説書いて誰に読ませたいか訊いてるのさ」

面倒臭くなってそういうふうにとめた。

暫時、隆臥は呆然としていたが、

「誰のためでもありません。」

僕の読者は神です。神に読んでもらえば最高です。書くことは、天に公開するためです。神のために書いています。作品が、内容が崇高で偉大で真であれば、人に読まれることは必須ではありません。

だから、できれば神の言葉で書きたいのです。眞實の言葉で書きたい。神に読んで戴きたい。人間に読んでもらっても意味がない。

人はただ自分に都合のいいものを自分のために肯定するだけです。自分を表明できるものを評価するだけです。

人の評価は気まぐれで、時代によって変わります。永遠ではない。

僕の読者は神です。神のために、永遠の評価のために書きます」

普蕭は咳払いをした。

「僕の友達は、天易真兮や同源叭羅蜜斗や天之哥舞伎や彝之べ裂たちを始め、奇人ばかりだが、君も極めつけのキの字だな。」

人間の言葉じゃなくて、神の言葉で書きたいのか。神のために書くというのは、まあ、ギリわからなくもないが」

隆臥はもう聞いていなかったが、独り言のように、

「人間の言葉は偶然からできた自然の産物だ。鳥の囀りや風の音のようなものだ。空っぽで、空疎で、意味がない。偶然にしかず、効果でしかない。本質や實體がない、アイデア idea がない。」

ただの合図で、その合図が出れば、心的な納得感情が湧くスイッチに過ぎない。中身は空っぽだ。辣蕪のようにどこまでも皮ばかりで、剥けば最後は何もなくなる。問えば、虚しい答しか返って来ず、無限に問いが続いて、行き着く究極の確固たる正解がない。

空疎な空転を繰り返して、實がない」

「相変わらず大きな独り言だな。君、それはドクサ（思い込み・独断・臆見）だよ。よく考えてみたまえ、その決めつけはどこから来たんだ？
それこそ空疎なものに過ぎない」

隆臥は暫時、意味を考えてぼうっとしていたが、

「そのとおりですが、科学的に現実を観察すれば、そうとしか見えません」

普蕭は唇を曲げた皮肉な笑みを浮かべて言う、

「観えたものが観えたとおりに眞實ならばね」

隆臥は項垂れた。

「それを言うと、もう何も言えない、何も行動できない、行為できない、思考不能です。
何もできない」

普蕭はキャラに似合わず、腹を抱えて笑った。

「できなくないさ。實際、今できてるじゃん。結局、人生ってそういうことなのさ」

……でも、まあ、それが空疎さを感じさせる中枢なんだが。

「別に誰も困っていなよ」

普蕭が俺にそう言った。そうだなと俺も思った。

夫一義

松溪寺などと名を聞くと、山深い溪谷を見下ろし、岩山に聳る大磐の垂直面に、障壁画によくありそうな、棚引く霞のような松が枝が横様に伸びる、厳かな古寺を聯想させる。実際、何ら意外性もなく、まさしくそのとおりの古刹であった。

その寺で、経蔵の奥から平安の末、源平の確執の時代に、空海の『般若心経秘鍵』を筆写した卷子本が見つかったという話を聞いて、早速、観に行った。

愛車のデューセンバーグはエラリー・クイーンが載っていたという設定になっているフル・レストアの太古の自動車で、道は舗装されているとは言え、山岳のワインディングを走るにはキツイものがあった。エンジンが唸り、エグゾースト・ノートが喘ぎのようでもある。葉巻は旨いが。

書は龍神のごとく風格のある雄勁な楷書で、隅寺心経の文字に似ていた。

秘鍵にこんな一節が在る。原文を正確に憶えていないので、僕の解釈で記すと、或る人が、

「般若は、初時の声聞乗である『阿含経』に次ぐ、第二時の縁覚乗で、二乗のうち（この二乗を小乗という）であって未了義（未だ完うしていない教え）であり、どうして華嚴や法相・唯識などの菩薩乗（大乘）を網羅し得ようか」

と言った（実際にそう言った人がいたのか、又は問う人がいるであろうという推測かは、僕には解釈し切れていない）ことに對し、空海は応え、

「如来の説法は一字に五乗の義を含んでいて」

五乗とは人乗・天乗・声聞乗・縁覚乗・菩薩乗の五つで、つまり、遺漏なく全網羅していると言っているのだ。

そして、空海は加えて、

「亀卦爻蓍（占い。亀卜と易筮）が亀の甲の亀裂や五十本の筮竹が万象を含んで尽きることがないのと同じだ」
と言っている。

そして、心経の最後の部分、陀羅尼のところ「羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶」について、初めの「羯諦」は声聞の行果を顕わし、二の「羯諦」は縁覚の行果を挙げ、三の「波羅羯諦」は諸々の大乘の行果を指し、四の「波羅僧羯諦」は真言密教の行果を明かし、五の「菩提薩婆訶」はそれら諸乗の究竟菩提の義を説くという。句義はこのように無量の義を持ち、これを総持という。劫を歴ても、尽くし難い、と言っている。

「一字に千理を含み、」とは、このように凄いというか、深い意味なのだ。

願わくば、小説の一字も、そのように甚深なものであつて欲しいものだ。一字が哲學であり、藝術であり、科學であり、真言（マントラ、陀羅尼）である小説。そのためには、書く人の力も必要だが、読む者の力も必要であろう。

だが、まあ、真分くんみたいに、「未了義？ 当たり前だの馬之助さ。

結構、結構、まことに結構、大いにまことに結構、現實は問題集じゃない、解答篇など附録されてない。答などない。何者でもない。非空、未空、絶空、狂裂自在の狂奔裂。

これこそが千理、萬理、億理、兆理、京理、垓・秭・穰・溝・澗・正・載・極・恒河沙・阿僧祇・那由他・不可思議・無量大数の理を含むというものぞ。ありふれた、ただの道端の石ころさ」

という人もいる。

はい、いつもと同じ。おあとがよろしいようで。ちゃんちゃん。

色即是空
しきすはくう

「そばくう (Soba Kuu)」

ちょうど蕎麦屋の前だったのだ。

「え？ 蕎麦食うの？」

「蕎麦を食べる (I Eat Soba Noodles.) じゃない」

「蕎麦食うって言わなかった？」

「Soba kuu は『蕎麦食う (I Devour Soba Noodles.)』 じゃない。蕎麦は空だ、
たのさ」

「紛らわし過ぎる、蕎麦屋の前で」

「まあ、これも、ゑにし (縁) だ。食べてくか」

「やっぱ、食べるのか」

縄暖簾をくぐった。

昭和の匂いぶんぶん。塗装のない無垢の木製椅子に坐る。卓の板面は凹みや瑕でデコボコだ。無味乾燥。

出された茶で一服し、

「ところで、蕎麦は空、って何」

「蕎麦も色^{ルビ}だろ？ 色即是空 (ヤドウル パンサー シューニヤター) なんだからさ、
蕎麦即是空。饅飩拉麵 Pasta 冷麵亦復如是」

「あのな……。ま、だから、蕎麦空か。やっとわかった。何の意味もないが」

「そりゃあ、空だから」

「そういう意味じゃないんだが。ま、いいや。」

空って、何もない、何でもない、ってことだよな？」

「まあ」

「じゃ、定義も特性もない？」

「いや、違うね。だって、それも定義じゃん」

「って、批判するそれも定義だけど？」

定義・特性・“かたち” がないんだから、違うとか、間違いとか、正しいとか、同じと
か言えないんじゃない？ って、これも定義・特性・“かたち” かあ」

「だから、空なんかない。存在しかない (当たり前か)。それゆゑ、相手にし^{する}ことない。
パルメニデスが『あらぬ (το μὴ οὐν)』を想うことも考えることも言^いうことも許さな
ったのは、そういうことなんだろうな」

「ならさあ、色即是空空即是色も成り立たないんじゃない？」

「成り立たなくさせるのも、定義とロジックだぞ」

「って、批判するそれもね。……ちつ、八方塞がりでやんす」

「俗世は甚深でありんす」

花魁言葉を使うことに意味はない。でも、バカバカしくて何だかおかしい、と彼は感じた。だから、この二人は気が合うんだろう。

「妙味だね」

天平普肅はそう言った。

そんな言葉を見せずし、真分くんは備前焼の蕎麦猪口の火嚢を眺め、

「いい景色だねー」

普肅は普肅で、それを無視し、

「そう言えば、空海は玄奘の譯した般若波羅蜜多心經を鳩摩羅什の譯だと想っていた節があるらしいね」

真分くんは未だ蕎麦猪口を眺めて、

「羅什が最初に漢民族の言葉に譯した人だからね」

「不思議、不思議、世の中は甚深微妙、摩訶不思議だね」

「そうね。ちなみに、世間一般に流布しているのは玄奘の譯した、

『舍利子色不異空空不異色 色即是空 空即是色 受想行識亦復如是』

であるけれども、貝多羅葉（椰子の葉）に遺ったサンスクリット語版の摩訶般若波羅蜜多心經を漢譯すると、

『舍利子 色空空 色不異空空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識亦復如是』

で、それを和譯すると、

『シャーリプトラよ、「感受の因子として想定される実在という特性」は「空という特性」である。「空という特性」がまさに「感受の因子として想定される実在という特性」である。（すなわち、感受因子の実在という特性と空という特性との二つがあるということではないため）感受因子の特性は空という特性と異ならず、空という特性は感受因子の特性と異ならない。感受因子実在の特性がすなわち空の特性そのものであり、空の特性がすなわち感受因子実在の特性そのものである。これは同じく『實在』の構成要素である感受・表象作用・構成力・識別に就いても同じである』
「ってことになる」

蕎麦が来た。

「お、来たね、蕎麦来^{きたル}」

「何、それ」

「え？ 森鷗外の『寒山拾得』で閭丘胤が小女に水をもって来いと命じて水が来たとき、
“水が来た”と表現しただろう。三島由紀夫が文章読本で取り上げた二節だ。曰く、漢文
の“水来^{きたル}”のような感じ、だと」

「ふーん。じゃ、食べますか」

山葵を擦る。蕎麦をずずずと啜る。「うまいな」

真兮が訊く、

「最近、いい古書あったかい？」

「神田神保もずつと行ってない」

「おや、書肆を営む人間が何と不謹慎な。

ちなみに、江戸時代、書肆街と言えば、日本橋界隈だったらしいね」

「知ってる。明治になって、神田の大名屋敷跡に法律の学校ができて、本の需要が高まっ
たって話でしょ」

「飯時には、こういう条理ある話がいいね」

「『饗宴 (Συνήθεια)』か」

「プラトンのね。古代ギリシャ人は食事後に飲み始めたんだ」

「體にいいね」

「そういう宴のときの話題は、異国の風物や事歴、歴史や哲学など条理ある話だったらし
い」

「いいね」

ずずずーっ。

「旨いなー」

「旨いよ。色即是空であっても旨いね」

「未定義だから仕方ない」

「それも一つの定義」

「楽劇『トリスタンとイゾルデ』だなあ」

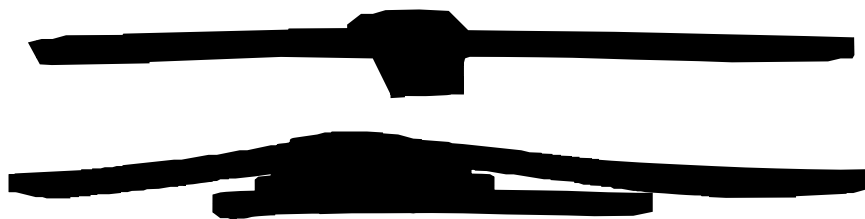
「もしかしたら、無限旋律って言いたい？」

ずー、ずずずーっ。 The Answer Is Lyn' In The Sound of Sipping Soba.

「旨いな、わかつちやいるけど、やめらんねえ」

ちなみに、スーダラ節のフレーズを故植木等氏の父（浄土真宗の僧侶）が「これこそ親鸞聖人の教えだ」と褒めたというエピソードがある。故青島幸男氏の作詞。

渡る世間は備前の緋襷。白志野焼の鐵絵附。



「人に読まれる小説が書きたいねー」

「そんなことを思うようになったんだ。軟弱だなあ」

「何なんだ、それ？」

「ゴリゴリハードでコアじゃなくっちゃ、お前じゃない。ゴッホは生前一枚しか絵が売れなかったんだぞ。売れるなんざ、芸術家じゃない、ただの売文業だ。売れない、理解されないが本物さ」

「あのなあ。俺はやだよ、勝手に決めんな」

「そこで、作麼生そもさん」

「おお、説破せつぱ」

「なぜ、宇宙開闢のビッグバンは起こったか。直に応えよ、急急如律令」

「ちよっと待て。それ、何か関係あるか？ 何だったんだ、さっきの前振り。

ってゆーか、そのお題は、ビッグバンの原因や仕組みや経緯を訊いているのか、それとも理由・根拠、意味・意義を訊いているのか」

「全部だ」

「そんなこと、考えてわかると思うか、特に意味とか、理由とか。

強いて言えば、宇宙が生まれる前は物質がなかったんじゃないか、ってくらいか」

「答えてんじゃないか。

まあ、そう思われるよなー、証拠はないけど、何となく」

「時間も空間もなかった、だから、運動も物理的法則もない、って何となく思っちゃうんだが」

「同感。一切の法則がなかった可能性もあるよな」

「それじゃ、」「それでわ、」

同時だった。昭和のガキンチョなら「ゑんガチよ」といふだろう。

「何だよ、ユニゾンでシンクロするなよ、せめてハーモニーにしてくれ」

「何のこだわりだよ。

で、ちなみに、何て言おうとした？」

「真之空だったんだろうな、って。

非空・絶空。パルメニデスの言う「あらぬ《ト・メー・エオン》」みたいな……。な
いという定義も無という特性もない。そういう「色《ルーパ》も「フォーム《かたち》もな
い。だから、有の反対概念じゃない」

「同様に、無際限な全肯定的な、又は、否定も否定して、非非非非みたいな、無際限な全否定……みたいな」

「まさしく狂裂自在、自由狂奔裂。」

これが究竟窮極の原理アルケーだ」

「だから、こんなふうになった」

「科学の話をしていたつもりだったが、まるで、哲学だ」

「量子力学なんか随分前からそういう感じがあったよ」

「科学と哲学の統一理論……かな?」

「眞究竟眞實義だ」

「科学哲学芸術宗教の大統一理論か。叡智の完成」

「畢竟ノ偈ヲ頌シテイハク（即説咒曰）！」

ぎやふとゐる　ぎやふとゐる　ふわりぎやふとゐる　ふわらすむぎやふとゐる　うおち　すうわあふわあは
空是非空絶空　空即是全　全網羅全肯定故　非裂非非裂非　未遂不收　狂裂自在　狂奔裂焉

空は絶空 非空なる哉かな 定義・特性 かたちなし

矛盾 生ずることもなく 違和相克も なかりせば

不合理せず
全網羅

全そのものなる
龍肯定

非にて非すらも
否む非非裂
それ非するゆゑ

一つのみ 網羅するのみ 一つしか 肯定をせず 一丈いちだけを 否定する哉

つひえよくなき 未遂不收

狂裂自在 狂奔裂焉 身も裂き碎き天翔け躍るよ

路傍に佇びし道祖神哉 ※この一節は古来不翻訳

(English 版)

Emptiness is non-emptiness (emptiness that transcends emptiness) . Non-Definition,

Non-characteristics, and formlessness

There is no contradiction, no conflict.

It encompasses all.

It is the whole itself, boundless and all-affirming.

It is total negation, negating even itself, and completely non-existent.

Therefore, it is to encompass only one thing, to affirm only one thing, and to deny only one thing.

It cannot be grasped, it is unfinished and uncollected.

It is perfect free, It is boundless as madness. It flying as if crazy out no border. It tears and shatters the body, soaring and leaping into the sky.

(Greek 版)

Η κενότητα είναι μη-κενότητα (κενότητα που υπερβαίνει την κενότητα). Μη-ορισμός, μη-χαρακτηριστικά και αμορφία.

Δεν υπάρχει αντίφαση, δεν υπάρχει σύγκρουση.

Περιλαμβάνει τα πάντα.

Είναι το ούνολο, απεριόριστο και απολύτως θετικό.

Είναι απολύτη άρνηση, αρνείται ακόμη και τον εαυτό του, και είναι εντελώς ανήπακτο. Επομένως, είναι να περιλαμβάνει μόνο ένα πράγμα, να επιβεβαιώνει μόνο ένα πράγμα και να αρνείται μόνο ένα πράγμα.

Δεν μπορεί να κατανοηθεί, είναι ημιτελές και σταζινόμητο.

Είναι απολύτα ελεύθερο, είναι απεριόριστο όπως η τρέλα. Πετάει σαν τρελό χωρίς όρια. Σκίζει και συντρίβει το σώμα, πετάει και πηδάει στον ουρανό.

(Chinese 版)

空性即非空性 (超越空性的空性)。无定义, 无特征与无形。

无矛盾, 无冲突。

它包罗万象。

它是整体本身，无边无际，肯定一切。

它是彻底的否定，甚至否定自身，完全不存在。

因此，它只涵盖一件事，只肯定一件事，只否定一件事。

它无法被把握，是未完成且未被收集的。

它是完美的自由，是无边无际的疯狂。它如疯般飞翔，无边无际。它撕裂并粉碎身体，翱翔并跃入天空。

(French 版)

Le vide n'est pas le vide (le vide qui transcende le vide). Non-définition, non-caractéristiques et absence de forme.

Il n'y a ni contradiction, ni conflit.

Il englobe tout.

Il est le tout lui-même, illimité et affirmant tout.

C'est la négation totale, niant même elle-même, et complètement inexistante.

Par conséquent, il s'agit d'englober une seule chose, d'affirmer une seule chose et de nier une seule chose.

Elle ne peut être saisie, elle est inachevée et non collectée.

Elle est parfaitement libre, elle est illimitée comme la folie. Elle vole comme si elle était folle, sans aucune frontière. Elle déchire et brise le corps, s'envolant et bondissant dans le ciel.

(German 版)

Leere ist Nicht-Leere (Leere, die über die Leere hinausgeht). Nicht-Definition, Nicht-Eigenschaften und Formlosigkeit.

Es gibt keinen Widerspruch, keinen Konflikt.

Es umfasst alles.

Es ist das Ganze selbst, grenzenlos und alles bejahend.

Es ist totale Negation, negiert sogar sich selbst und ist völlig nicht existent.

Daher geht es darum, nur eine Sache zu umfassen, nur eine Sache zu bejahen und nur eine Sache zu verneinen.

Es kann nicht erfasst werden, es ist unvollendet und ungesammelt.

Es ist vollkommen frei, es ist grenzenlos wie Wahnsinn. Es fliegt wie verrückt ohne Grenzen. Es zerreißt und zerschmettert den Körper, schwebt und springt in den Himmel.

(Spanish ॥॥)

El vacío es no vacío (el vacío que trasciende el vacío). No definición, no características y ausencia de forma.

No hay contradicción, ni conflicto.

Lo abarca todo.

Es el todo en sí mismo, ilimitado y que lo afirma todo.

Es negación total, negándose incluso a sí mismo, y completamente inexistente.

Por lo tanto, se trata de abarcar solo una cosa, afirmar solo una cosa y negar solo una cosa.

No se puede comprender, es inconcluso e incommensurable.

Es perfectamente libre, es ilimitado como la locura. Vuela como si estuviera loco sin fronteras. Desgarra y destruye el cuerpo, elevándose y saltando hacia el cielo.

(Hindi ॥॥)

शून्यता अशून्यता है। शून्यता जो शून्यता से परे है। अ-परिमाण, अविशेषताएँ और निराकार।

इसमें कोई विरोधाभास नहीं, कोई संघर्ष नहीं।

यह सबको समाहित करता है।

यह स्वयं समग्र है, असीम और सर्व-पुष्टिकारक।

यह पूर्ण निषेध है, स्वयं को भी नकारता है, और पूरी तरह से अस्तित्वहीन है।

इसलिए, यह केवल एक ही चीज को समाहित करता है, केवल एक ही चीज की पुष्टि करता है, और केवल एक ही चीज का खंडन करता है।

इसे समझा नहीं जा सकता, यह अधूरा और असंग्रहित है।

यह पूर्णतः मुक्त है, यह पागलपन की तरह असीम है। यह बिना किसी सीमा के पागलों की तरह उड़ रहा है। यह शरीर को चीरता और चकनाचूर करता है, आकाश में उड़ता और छलांग लगाता है।

(Italian ॥॥)

Il vuoto è non-vuoto (vuoto che trascende il vuoto). Non-definizione, non-caratteristiche e assenza di forma.

Non c'è contraddizione, né conflitto.

Comprende tutto.

È il tutto stesso, illimitato e che afferma tutto.

È negazione totale, nega persino se stesso ed è completamente inesistente.

Pertanto, si tratta di comprendere solo una cosa, affermare solo una cosa e negare solo una cosa.

Non può essere afferrato, è incompiuto e non raccolto.

È perfettamente libero, è illimitato come la follia. Volà come un pazzo senza confini.

Strappa e frantuma il corpo, librandosi e balzando nel cielo.

(Arabic 𐤀𐤌𐤃𐤌)

العدم ليس عدم وجود (العدم لا يتجاوز مجرد عدم الوجود). لا تعريف له، لا خصائص له، لا

شكل له

لا تناقض ولا تعارض

يشمل كل شيء

مكتفٍ بذاته، بلا حدود، يؤكد كل شيء

إنه نفي كامل، وينفي نفسه، ووجوده نفسه غير موجود

وبالتالي، فهو يشمل شيئاً واحداً فقط، ويؤكد شيئاً واحداً فقط، وينفي شيئاً واحداً فقط

إنه غير مفهوم، ولا يمكن تحقيقه، ولا نهاية له

،إنه حر تماماً، ولا حدود له مثل الجنون. يطير بلا حدود مثل الجنون. يمزق الجسد، ويدمره

.ويطير في السماء، ويقفز

(Russian 版)

Пустота – это непустота (пустота, превосходящая пустоту). Неопределенность, отсутствие характеристик и бесформенность.

Нет противоречий, нет конфликтов.

Она охватывает все.

Она – это само целое, безграничное и всеподтверждающее.

Это полное отрицание, отрицающее даже само себя, и полностью несуществующее. Поэтому он должен охватывать только одно, утверждать только одно и отрицать только одно.

Его нельзя понять, оно незавершенное и несобраное.

Оно совершенно свободное, оно безгранично, как безумие. Оно летит, как сумасшедшее, без границ. Оно разбивает и разбивает тело, взмывая и прыгая в небо.

(Turkish 版)

Boşluk, boşluk değildir (boşluğu aşan boşluk). Tamamlanmaz, özellikleri yoktur ve şekilsizdir.

Çelişki yoktur, çatışma yoktur.

Her şeyi kapsar.

Sınırsız ve her şeyi onaylayan bütünün kendisidir.

Tamamen olumsuzdur, kendini bile olumsuzlar ve tamamen yoktur.

Bu nedenle, tek bir şeyi kapsar, tek bir şeyi onaylar ve tek bir şeyi reddeder.

Kavranamaz, tamamlanmamış ve toplanmamış.

Mükemmel özgürdür, delilik kadar sınırsızdır. Sanki deli gibi sınırsızca uçar. Bedeni yutur parçalar, gökyüzüne yükselir ve sıçrar.

(Vietnamese 版)

Trống rỗng là không trống rỗng (trống rỗng vượt qua trống rỗng). Không định nghĩa, không đặc tính và không hình tượng.

Không có mâu thuẫn, không có xung đột.

Nó bao trùm tất cả.

Nó chính là toàn thể, vô biên và khẳng định tất cả.

Nó là sự phủ định tuyệt đối, phủ định ngay cả chính nó, và hoàn toàn không tồn tại.

Vì vậy, nó chỉ bao trùm một điều, chỉ khẳng định một điều, và chỉ phủ nhận một điều. Nó không thể nắm bắt, nó chưa hoàn thành và chưa được thu thập.

Nó là tự do hoàn hảo, nó vô biên như điện sóng. Nó bay như điện ra khỏi biên giới. Nó xé toạc và phá vỡ cơ thể, bay lên và nhả vào bầu trời.

(Ukrainian 乌克兰)

Пороженча є непороженчею (пороженча, що виходить за межі порожнечі). Невизначеність, відсутність характеристик і безформність.

Немає суперечностей, немає конфліктів.

Вона охоплює все.

Вона є цілим, безмежним і всепідтверджуючим.

Вона є тотальним запереченням, заперечуючи навіть саму себе, і повністю неіснуючою.

Тому вона охоплює тільки одне, стверджує тільки одне і заперечує тільки одне. Її неможливо осягнути, вона незавершена і незіорана.

Вона досконала у своїй свободі, безмежна, як божевільня. Вона летить, наче божевільна, без кордонів. Вона розриває і розбиває тіло, згигаючи і стигаючи в небо.

(Indonesian 印尼)

Kekosongan adalah bukan kekosongan (kekosongan yang melampaui kekosongan).

Bukan definisi, bukan karakteristik, dan tanpa bentuk.

Tidak ada kontradiksi, tidak ada konflik.

Ia mencakup segalanya.

Ia adalah kesatuan itu sendiri, tak terbatas dan menegima segalanya.

Ia adalah penolakan total, bahkan menolak dirinya sendiri, dan sepenuhnya tidak ada.

Oleh karena itu, ia hanya mencakup satu hal, hanya mengafirmasi satu hal, dan hanya menafikan satu hal.

Ia tidak dapat dipahami, ia belum selesai dan belum terkumpul.

Ia sempurna bebas, ia tak terbatas seperti kegunaan. Ia terbang seolah gila tanpa batas.

Ia merobek dan menghancurkan tubuh, melosat dan melompat ke langit.

(Norwegian 挪威)

Tomhet er ikke-tomhet (tomhet som overskrider tomhet). Ikke-definisjon, ikke-egenskaper og formløshet.

Det er ingen motsetning, ingen konflikt.

Det omfatter alt.

Det er helheten selv, grenseløs og altbekreftende.

Det er total negasjon, som negerer selv seg selv, og er fullstendig ikke-eksisterende.

Derfor er det å omfatte bare én ting, å bekrefte bare én ting og å benekte bare én ting.

Det kan ikke gripes, det er uferdig og usamlet.

Det er fullstendig fritt, det er grenseløst som galskap. Det flyr som om det er gal uten grenser. Det river og knuser kroppen, svever og hopper opp i himmelen.

(Hungarian 望)

Az üresség nem üresség (az ürességet meghaladó üresség). Nem definálható, nem jellemezhető és formátlan.

Nincs benne ellentmondás, nincs konfliktus.

Mindent magában foglal.

Maga a teljes egész, határtalan és mindent megerősítő.

Tejles tagadás, még önmagát is tagadja, és teljesen nem létező.

Ezért csak egy dolgot foglal magában, csak egy dolgot fogad el, és csak egy dolgot tagad.

Nem lehet megragadni, befejezetlen és össze nem gyűjtött.

Tökéletesen szabad, határtalan, mint az őrlület. Repül, mintha őrlült lenne, határok nélkül. Széttépi és összetöri a testet, szárnyalva és ugrálva az égbe.

(Hebrew 望)

ריקנות היא אי-ריקנות (אי-הגדרה, אי-מאפיינים והסדר צורה.

איך סתירה, איך קונפליקט.

היא מקיפה את הכל.

היא השלם עצמו, ללא גבולות ומאטורות הכל.

היא שלילה מוחלטת, שוללת אפילו את עצמה, ובכלתי קיימת לחלוטין.

לכן, היא מקיפה דבר אחד בלבד, מאטורת דבר אחד בלבד, ושוללת דבר אחד בלבד.

אי אפשר לתפוס אותה, היא לא גמורה ולא מאוחרת.

היא חופשית לחלוטין, היא אנוכיות כמו טורף. היא עפה כאלו היא משוגעת, ללא גבולות. היא קורעת ומנפצת את העור, מתעופפת וקופצת לשמיים.